

本をあわせて、計一九本と推測できるだろう。さらに巻首の一本に統いて、「唐子闡國三藏沙門実叉難陀訳」と記す一本があつたとすれば（裏面はなし）、合計二〇本で一把であったと推定できる。

元興寺のこけら経では、二〇本一組の根元をこよりでゆわえた例がある。扇面のように広げて読経し、表が終れば裏返して読んだらしい。本例ももとはこよりでゆわえられたまま、放棄されたものと推測される。

(1)はこけら経写経に関わるものである。また「×七月廿四日 地蔵講經 加賀公分」とするものがあり、こけら経の写経や転読にかかる内容をもつ。

(2)は経典名を把握していないが、下部の「三 十一」は、例え三卷の十一番目というように、こけら経の順序を示したものと解される。元興寺にも同様の例がある。本遺跡のこけら経にも、ほかに「地上 四」と下部に記すものがあり、「地藏菩薩本願經上巻」の第四番目の意味かと思われる。

(3)は五輪塔状に左右側刃を刻んだ笹塔婆である。以上に示したもののはかに、五輪塔の絵、僧侶の顔、鳥帽子をかぶった武士の横顔を細筆で描いたものなどがある。地中から出土したこけら経としては残りのよいものであり、木簡学の立場からも種々の考察が可能であろう。

(1~7 中井一夫、8 和田萃)

奈良・藤原京跡

1	所在地	奈良県橿原市木之本町
2	調査期間	一九八五年（昭60）一二月~一九八六年八月
3	発掘機関	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4	調査担当者	岡田英男

5	遺跡の種類	宮殿・官衙・都城跡
6	遺跡の年代	七世紀末~八世紀初頭
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	

香久山の西麓において一九八五年の第四五・四六次調査に統いて第四七・五〇次（西）調査を行つた。第四五・四六次調査地を合わせた総面積は二〇〇〇〇m²で、ほぼ藤原京左京六条三坊の東北坪と東南坪に当たる。このうち第四七・五〇次（西）調査地は六条三坊の中心部および東北坪西南部に当たる。両調査地は東西に接しており、面積は合わせて四〇〇〇m²である。

第四五次から第五〇次までの調査の所見を簡略に述べると、遺構は古墳時代から室町時代まであり、そのうち藤原宮期はA・B二時期に大別できる。

A期は道路と区画の堀を中心とした時期で、東三坊坊間路、六条間路、坪の周囲を限る堀、坪を東西あるいは南北に二分する堀などがある。

どである。坊間路は八二m、条間路は六〇m分を検出したが、条間路は想定位置より約一四m北にある。両路は調査地西端で交差する。

建物は、東南坪に小規模建物二棟、東北坪に三棟ある。この三棟の建物は柱筋を揃える関係にあるが、その性格は今のところ不明である。坊間路の北には東西大溝SD四一三〇があり、奈良時代にも存続する。調査地東端の香久山に近接する付近には幅一九m以上、深さ一・二mの南北大溝SD四一四三があり、東三坊大路想定位置に当たるが、大規模であることから藤原京の東堀河である可能性がある。先の東西大溝SD四一三〇はこのSD四一四三に接続する。

B期は道路や区画の堀が大きく改められ、大規模な建物が整然と配されて坊内の利用状況が一変する時期である。まず条間路・坊間路や、東南坪を南北に分ける堀は廃され、東北坪・東南坪とも坪内を東西に二分する南北堀より西が一体のものとして利用され、東半部は空閑地となっていたようである。

建物は、坊間路・条間路が交差していた位置のやや南で、坊の中心に当たるところに七間×三間の身舎に土庇のついた東西棟建物SB五〇〇〇があり、これを中心に八棟の東西棟建物や南北棟建物が整然と並ぶ。SB五〇〇〇はこの建物群の正殿とみられ、前殿や脇殿に相当するとみられる建物もある。

これらの建物群は正殿が坊の中心部にくるので、一坊全体の占地に基づく配置と考えられるが、一坊の占地は藤原京では初めての検

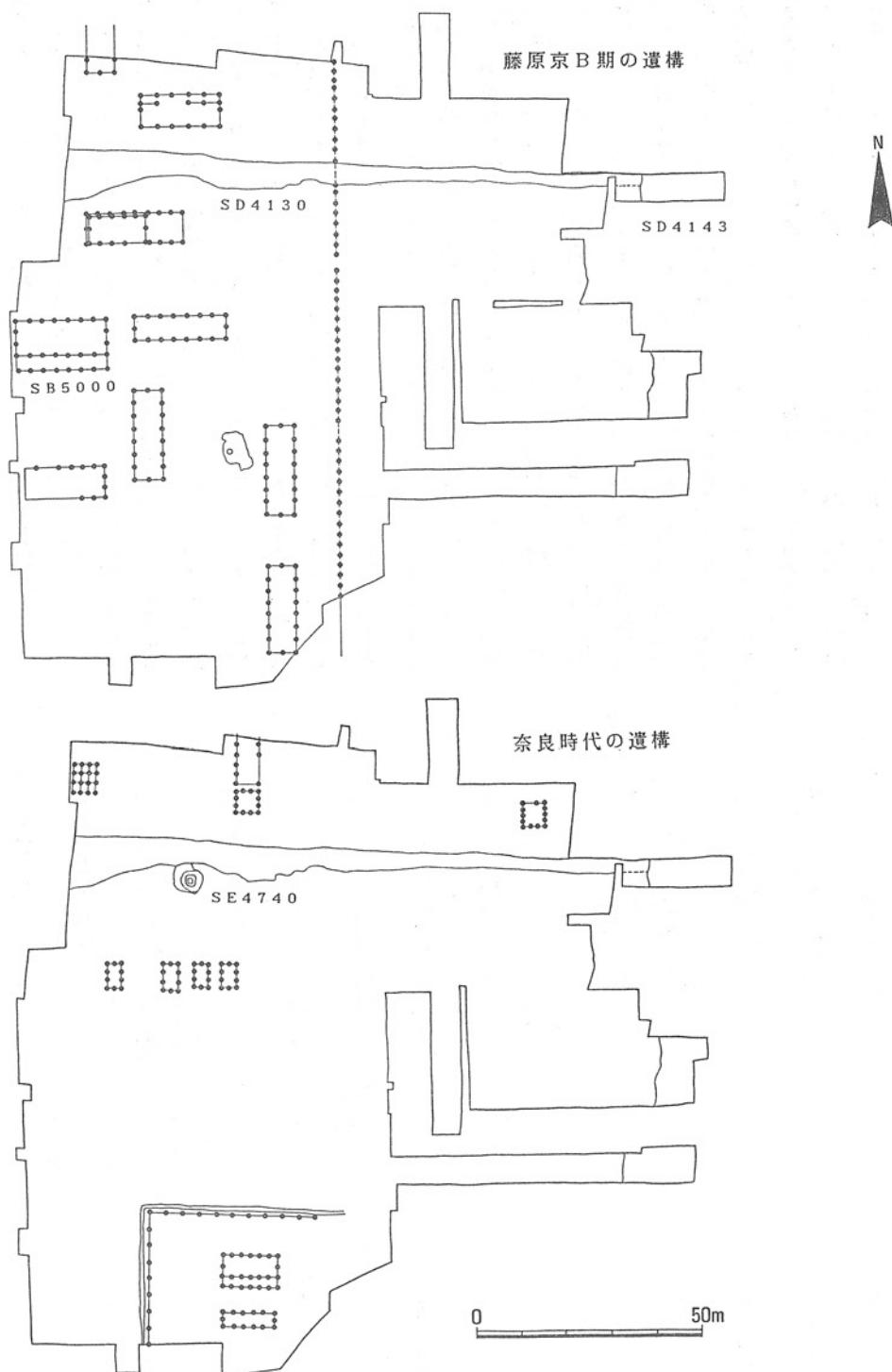
出例である。その性格については宮殿邸宅とも、官衙とも考えられるが明確でない。

次に奈良時代になると、大規模な区画施設や整然とした建物群はみられなくなるが、なお建物一〇棟が検出されており、引き続き重要地域として機能していたようである。

調査地南半では堀と溝による方形区画内に南北に並ぶ二棟の東西棟建物を配置しており、北半では総柱の倉庫風建物や、東西に並ぶ小建物がある。また藤原京A期以来の東西溝SD四一三〇がこの時代にも存続しており、その第四七・五〇次（西）調査地内で木簡・墨書土器が出土した。また第四七次調査地には大溝の南岸に接して井戸SE四七四〇があり、呪符・墨書土器が出土した。

東西大溝SD四一三〇は坊の想定心から三六m北の位置にあり、総長一二〇m分を検出した。東方では幅四・五m、深さ一・五mであるが、西に向かって次第に深くなり、調査地西端では幅一・一m、深さ一・八mを測る。東端は南北大溝に接続するが、溝底のレベルからみて西流していたのである。北岸は比較的直線的で、当初の姿をとどめているとみられるが、南岸には大きくえぐられた部分がある。堆積土は下から茶褐色砂礫・青灰色粘質土・灰褐色粘質土および淡い褐色粘質土に分けられる。茶褐色砂礫層は溝底にわずかに残存し、七世紀の遺物を含み、この溝の開削が藤原宮期までさかのぼることを示している。青灰色粘質土は奈良時代の層で、何度も流

1986年出土の木簡



第47・50次（西）遺構略図

路を変えながら流れた様子がうかがえるが、しだいに滯水するようになり、平安時代になつて埋め立てられた。

この溝からは多数の遺物が出土しているが、藤原宮期のものは少なく、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多い。主な遺物としては、木簡二五点、墨書のある斎串一点、「香山」の墨書土器二点など墨書土器六一点、陶硯・綠釉獸脚硯・風字硯・黒色土器、土馬・製塙土器・ミニチュア土器、輪羽口・ベルメット押捺文軒丸瓦、人形・斎串・刀子形・馬形、木針、櫛、琴柱、鉄釘、和同開珎が出土した。木簡と墨書のある斎串は東西大溝のうち、南岸に接する井戸付近から西の奈良時代の層から出土した。靈龜三年の年紀のあるものがあり、他の木簡も奈良時代前半のものとみてよいであろう。

東西大溝S D四一二〇の南岸に接する井戸SE四七四〇は、方形横板組で、内法一辺〇・九mあり、横板は平均一二枚ほど残り、高さ三・〇m内外である。掘形は上端が径約六mの不整円形で、底部は一辺一・七m内外の方形となる。深さは三・六mある。井戸枠内からは呪符一点の他、「香山」の墨書土器一〇点など墨書土器三一点、土師器・須恵器・黒色土器、瓦、鎌・環状鉄製品・鉄釘・小環付金銅製細棒、無文銀錢・和同開珎等が出土した。土器は最下層から飛鳥VI～平城宮III段階、下層から平城宮III段階、中層から平城宮VI段階、上層からは九世紀～一〇世紀初頭のものが出土した。呪符は最下層から、墨書土器の大部分は下層からの出土である。

8 木簡の积文・内容

井戸SE四七四〇

(1) 「□不殺 (符籙)未方女者」
(上面ニ墨線アリ)

150×15×5 061

東西大溝S D四一三〇

(2) 「収靈龜三年稻 養×」
(3) 「菜採司謹白奴□嶋逃〔行カ〕」
・「別申病女〔以前カ〕如□」
・「斤得三束〔遣カ〕二束」
〔把カ〕

(118)×(20)×4 081

203×29×3.5 011

□斤得三束〔遣カ〕二束」

(302)×18×4 019

(4) 百廿七束一□

091

(5) 「廿カ」

091

(6) 「四月廿カ日」
・「三カ」

(51+26)×32×2 019

(7) 「斗四升」

97×(17)×3 081

(8) □小豆□□□□

(84)×29×4 019

(9) □人カ夫等

(41)×(18)×1 081

1986年出土の木簡

(10) •「▽▽近江国蒲×

・「▽▽宿□戸×

(95)×22×4 039

(11) 「▽▽六斗」

135×22×5 032

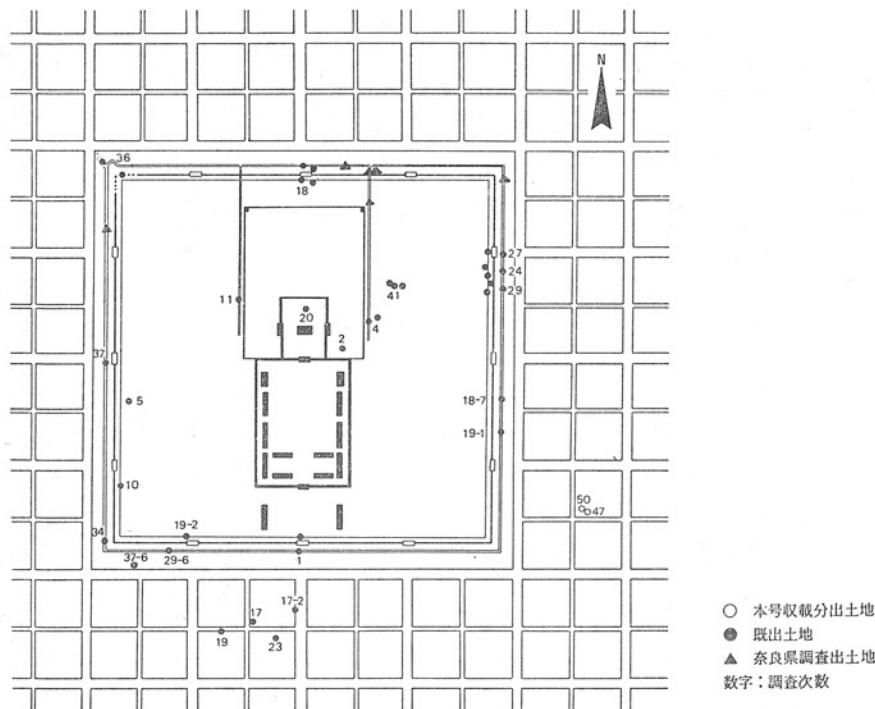
(12) 「左京職」(斎串)

163×23×6 061

(2)の木簡は官司あるいは庄所などでの稻の収納を示しているが、貢進物荷札や「菜採司」と記した木簡があるので官司の可能性がある。天平二年の『大倭國正税帳』によれば養老四年と七年に「香山正倉」の存在が知られるが、この木簡と関係があるうか。多量の「香山」の墨書き土器が出ているように、カグヤマを「香山」と書く例は多い。(2)は斎串で、左京職は平城京のものであろう。そうすると、平城左京職との場所との関係が問題となる。平安京の例では左京職の官衙神として左京二条に久慈真智命神が祀られており、『延喜式』(神名上)ではこの神について「本社 坐大和國十市郡天香山坐櫛真命神」とあるので、天香山に鎮座の神を分祀したものであることが知られる。あるいは手掛かりとなるであろうか。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(八)』(一九八七年)
同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一七』(一九八七年) (加藤 優)



藤原宮木簡出土地点略図